

# 山田耕筰の目指す歌唱法 1

## ソプラノ編（三浦環）

林 満理子

The Ideal Singing Style Considered by Kósçak Yamada 1

HAYASHI Mariko

(Received September 25, 2015)

### はじめに

本稿は山田耕筰の考える歌唱法と大正から昭和期（1900年頃～1960年頃）に活躍した歌手の演奏を照らし合わせて、山田耕筰が当時の歌手たちの何を問題視していたのかを具体的に明らかにするものである。

### 山田耕筰の考える日本歌曲の歌唱法

山田耕筰は1950年に出版された『山田耕筰名歌曲全集』第1巻の巻末で「日本歌曲とその基本的な演唱・演奏法に就いて」以下の10項目に渡り述べている。

- ・ <sup>リート</sup> 歌曲に就いての私見
- ・ 發聲と發音
- ・ 聲樂語としての日本語
- ・ 日本的歌唱法
- ・ 不快なスラーやポルタメント
- ・ <sup>レガート・スイング</sup> 滑らかな唱ひ方
- ・ 二音以上に跨る一綴音の唱ひ方
- ・ 聲樂に於ける發音
- ・ 言葉の組立
- ・ 音の強弱と口形

この10項目では、歌と言葉の関係がいかに大切かを説いており、日本歌曲の歌唱法のなかでも發音に対して大変なこだわりを見せている。たとえば「發聲と發音」では次のとおりである。

要するに、發聲とはその國の言葉を正しく美しく發音する術を言ふのである。發聲と發音が全く同義語と言はれてゐるのはそのためなのだ。こんな理論はもう三十年も前に定められてゐるのだが、この國では、この自明の理に對する認識すらも持つてゐる人は少ない。

その意味から言へば、日本の歌曲を唱ふには、日本語を正しく美しく發音する發聲を

知らなければならない。外国語の発音をそのまま邦語に應用するから、歌ひ手の日本語は判らないなどと言われるのである。

そのうえで「聲樂に於ける發音」において以下の苦言を呈している。

この場合、詩人の言はうとする語らうとする言葉の薫り、流れ、力、味などを、いさゝかも失はずに、明確に浮び出させるためには容易ならぬ努力が必要であるのは言ふまでもないことである。しかし、今日まで私の耳にした多くの歌者は、たゞ旋律に乗せてそれらの言葉を、無感情に、無雑作に發音するのみで、他に何物をも考慮してゐないかのやうに思はれた。しかも、その發音すらも極めて曖昧なものが多いのであった。

### 『山田耕筈の遺産』に収録されている歌手

このように山田耕筈は当時の歌い手たちの歌い方にかかなりの不満をもっていたのだが、具体的に何を問題視していたかが不明である。そこでその手がかりを日本コロムビアから1996年に制作された『山田耕筈の遺産』から歌曲編Ⅰ～Ⅵの6枚のCDに収められた145曲を聴取して探してみたい。この145曲の内訳は『歌曲編Ⅰ』25曲、『歌曲編Ⅱ』26曲、『歌曲編Ⅲ』23曲、『歌曲編Ⅳ』22曲、『歌曲編Ⅴ』25曲、『歌曲編Ⅵ』24曲で、ソプラノ11名によって80曲、メゾ・アルト・コントラルト4名によって6曲、テノール9名によって36曲、バリトン・バス4名によって10曲、流行歌手4名によって13曲が演奏されている。

表1 『山田耕筈の遺産』歌曲編Ⅰ～ⅥのCD収録されている歌手と曲数

CDⅠ～Ⅵ	歌手名	パート	曲数
Ⅰ	三浦環	ソプラノ	6
Ⅰ	荻野綾子	ソプラノ	13
Ⅰ	関屋敏子	ソプラノ	1
Ⅰ	斎藤静子	アルト	3
Ⅰ	クララ・バット	コントラルト	1
Ⅰ	柴田秀子	メゾ	1
Ⅱ	藤原義江	テノール	18
Ⅱ	徳山穂	バリトン	1
Ⅱ	湯山光三郎	テノール	2
Ⅱ	小森譲	バリトン	3
Ⅱ	川崎豊	テノール	1
Ⅱ	パーシー・ブカナン	テノール	1
Ⅲ	ベルトラメリ能子（鉄能子）	ソプラノ	17
Ⅲ	原信子	ソプラノ	6
Ⅳ	奥田良三	テノール	2
Ⅳ	牧嗣人	バス	2
Ⅳ	内本実	テノール	6
Ⅳ	松平晃	流行歌手	1
Ⅳ	伊藤久男	流行歌手	3
Ⅳ	伊藤武雄	バリトン	3
Ⅳ	藤山一郎	テノール	1

IV	木下保	テノール	4
V	宮川美子	ソプラノ	8
V	松原操	流行歌手	7
V	二葉あき子	流行歌手	2
V	浅野千鶴子	ソプラノ	3
V	加古三枝子	ソプラノ	1
V	三枝喜美子	アルト	1
V	松田トシ	ソプラノ	1
V	田中路子	ソプラノ	2
VI	辻輝子 (山田真梨子)	ソプラノ	22 <sup>1</sup>
VI	伊藤武雄	バリトン	1
VI	渡辺高之助	テノール	1

### ソプラノ 三浦環

本稿は『歌曲編 I』よりソプラノ歌手・三浦環の歌う6曲を対象とし、分析を行いたい。  
三浦環の経歴は『ニューグローブ世界音楽大辞典 第17巻』に基づくと下記のとおりになる。

1884年生～1946年没。ソプラノ歌手。東京音楽学校(現、東京芸術大学音楽学部)に入学。在学中、日本で初めての日本人歌手による完全日本語訳の歌劇公演、グルック作曲『オルフォイス』に出演する。1904年に同校の研究科へ進み、また同校助手となる。1910年、帝国劇場歌劇部へ教師として迎えられ、首席歌手としても『カヴァレリア・ルスティカーナ』を日本初演した。1914年、イギリスのアルバート・ホールで『リゴレット』の Aria を歌い海外デビューに成功し、1915年5月にオペラ・ハウスでプッチーニの『蝶々夫人』に初めて出演。以来、1935年の引退まで2000回主演をつとめた。指導した弟子の中には原信子、関屋敏子らがいる。

日本人初のプリマドンナと言っている彼女はどのような歌唱をしていたのだろうか。彼女の歌唱を分析してみたい。三浦環が歌っているのは下記の6曲である。

1. 日本古謡、山田耕筰編曲《来るか来るか》
2. 日本古謡、山田耕筰編曲《きんにゃもにゃ》
3. 北原白秋作詩、山田耕筰作曲・編曲《松島音頭》
4. 寺下辰夫作詩、山田耕筰作曲・編曲《園の夢》(夫を憶いて)
5. 佐藤惣之助作詩、山田耕筰作曲・編曲《そりゃそうだ》
6. 白鳥省吾作詩、山田耕筰作曲・編曲《佐渡の金山》

### 三浦環の歌唱分析

この6曲を聴取し、聴き取りにくい発音と聴き取りやすい発音について分析を行う。

<sup>1</sup>22曲のうち1曲はバリトンとの共演となっているが、共演者は表に含んでいない。

## 1. 日本古謡、山田耕筰編曲《来るか来るか》

録音年月日：1917年11月9日

歌手：三浦環

共演者：ピアノ不明

表2

聴き取りにくい発音	
子音	K 「来るか」「気は」
	T 「来るかと」「やっとかけな」
	S 「すかれた」
	TS 「松風」
	Z 「松風」

この録音はノイズが多く、言葉がほぼ聴こえなかったため、楽譜を見なければ何を言っているのか分からなかった。特に聴こえなかったのはK、S、Z、T、TSの子音であった。3・4小節目の「来るか」の2つのKは、歌い出しであることやアクセントが付いているにもかかわらず不明瞭であった(譜例1<sup>2</sup>)。9小節目の「すかれた」のSはフレーズのはじめでフォルテであれば発音しやすいように思われるが聴き取りにくかった(譜例2)。聴き取りやすかったのはB、D、M、N、Yの子音であった。「水仙」のNは音を移行しながら延ばすこともあり、意識的に発音しているように思われた(譜例3)。また詩に関して、「ほいの」は「ほいさ」と歌われている。また1番と2番の詩が混同している個所があった。

譜例1

くるさい — かた

譜例2

はますか — へれでて —  
かた — —

譜例3

くるすい — くるせ — かん — と

## 2. 日本古謡、山田耕筰編曲《きんにやもにや》

録音年月日：1917年11月9日

<sup>2</sup> 譜例の□で囲んでいるところは聴き取りにくい個所を、○で囲んでいるところは聴き取りやすい個所を表している。

歌手：三浦環

共演者：管弦楽不明

表 3

聴き取りにくい発音		
子音	S	「咲いた」
	N	「つなぐ」
	M	「駒」
	G	「花が」
	K	「かちゃほこ」
	C	「かちゃほこ」

この録音もノイズが多く、5小節目「咲いた」が「ないた」に聴こえるなど、言葉が不明瞭であった（譜例4）。特に聴き取りにくかったのはS、K、N、M、G、C<sup>3</sup>の子音であった。聴き取りやすかったのはY、M、N、Sの子音であった。7小節目から8小節目にかけてはフレーズのはじめのNを除いて他の子音は不明瞭である（譜例5）。「勇めば」「きんにゃもにゃ」のS、N、Mの子音は聴き取りやすかったが、これは音程も高くはなく、口をあまり開けなくても発音が可能なのであると思われる（譜例6）。

譜例 4

さ い た さ — く ら に

譜例 5

な ぜ こ — ま — つ な — ぐ

譜例 6

こ ま も い — さ め ば や れ き ん に や も に や

## 3. 北原白秋作詩、山田耕筰作曲・編曲《松島音頭》

録音年月日：1932年5月31日

歌手：三浦環

<sup>3</sup>「ちや、ち、ちゅ、ちえ、ちよ」については本稿に先行する「準母音の子音における発音の特徴」に準ずる。

共演者：山田耕筰（指揮）・日本コロムビア交響楽団

表4

聴き取りにくい発音		
子音	H	「ひともと」「ほうれ」「ほうい」「舟ばた」「星の」
	K	「桔梗」「ここは」
	S	「咲いた」「さんささんさ」「雄島が崎よ」
	M	「ありゃ松かぜよ」「ひともと」
	D	「誰をまつやら」
	C	「ちろり」
母音	A	「ありゃ」
	O	「雄島が崎」

聴こえにくかったのは、「ありゃ」「雄島が崎」のはじめのAとOの母音、H、S、K、D、C、Mの子音であった。聴こえにくかった母音については音程が低いためと考えられる。聴き取りやすかったのはM、Yの子音であった。「や ほうれ ほうい」のYの子音はよく聴こえるが、Hの子音は不明瞭であった（譜例7、8）。「ほうい」について休符の後であればHの子音を強調しやすい個所と思われるが聴き取りにくかった（譜例8）。「ひともと」のHの子音、「桔梗」のKの子音、「さんさ」のSの子音についても休符後の子音であるため同じように強調しやすいと思われるが聴き取りにくかった（譜例9・10）。「見たよ 見ました」のMの子音について聴き取りやすかった。両唇をしっかり接触させなければ発音できないためであると思われる。

譜例7

譜例8

譜例9

譜例10

4. 寺下辰夫作詩、山田耕筰作曲・編曲 《園の夢》（夫を憶いて）

録音年月日：1932年5月31日

歌手：三浦環

共演者：山田耕筰（指揮）・日本コロムビア交響楽団

表5

聴き取りにくい発音	
子音	S 「園に」「白き」「さやけき」「答えなそ」
	D 「呼べど」
	K 「君の」「答えなそ」「かなしや」
	H 「花」「花陰に」
	Y 「夕暮」「夢みれば」「君よと」
母音	O 「園に」
	U 「夕暮」「夢」

聴き取りにくかったのはS、H、K、Yの子音であった。2小節目「園に」は高音のためか完全に「しのに」に聴こえ、11小節目「呼べど」は「呼べば」に聴こえていた（譜例11）。聴き取りやすかったのはY、M、Bの子音であった。「散りしきて」のTの子音に関してはアルファベットを発音するような意識がうかがえた。1小節目「夕暮」と3小節目の「夢」、10小節目の「呼べど」のYの子音についても、発音の前に「イ」が聴こえることから発音に対する意識が伺えた（譜例12）。しかし17小節目と21小節目の「夕暮」「夢」は同じ言葉でも不明瞭となっている（譜例13・14）。母音に関しては「夕暮」「夢」のウの母音がオに聴こえた。

譜例11

そ の -に、 よ べ -ど、

譜例12

ゆ う ぐ れ、 そ の -に、 ゆ め -み れ

譜例13

ゆ う ぐ れ、 -か

譜例14

か い な き -ゆ め の、



歌手：三浦環

共演者：山田耕筰（指揮）・日本コロムビア交響楽団

表 7

聴き取りにくい発音		
子音	K	「紺の」「坑夫」「なった気さ」「金山」「見にゆけば」
	H	「ひともと」「日はまひる」「一望(ひとめ)」「燈(ひ)」「花が散る」「坑夫」
	S	「佐渡」「坑内 <sup>しき</sup> 」「桜ひともと」
	N	「金色」
	T	「ただ」
	TS	「土」

この録音は言葉の聴き取りにくさが目立った。聴き取りにくかったのはH、S、K、T、TS、Nの子音であった。聴き取りやすかったのはC、TSの子音であった。はじめの「紺の」「坑夫」のKの子音は聴き取りにくかった。「紺の」のKの子音と、「佐渡の」「桜ひともと」「坑内に」のSの子音は休符後で発音の準備がしやすいように思われるが聴き取りにくかった（譜例17・18・19・22）。Hの子音は特に聴き取りにくく、多数の箇所該当した（譜例19・20・21・22）。「金色」のNの子音は発音する際の舌を歯茎へ接触させる意識がないために「きういろ」と歌われている（譜例21）。「ちょっと」のCの子音と「美しい」のTSの子音は聴き取りやすかった（譜例23・24）。録音では「坑内に」と歌われているが、楽譜では「坂に」となっている。

譜例17

parlando  
p  
こんの、こうふぎ、

譜例18

mf  
accel. un poco  
さどの、かなやま、

譜例19

mf  
accel. un poco  
さくら、ひともと、

譜例20

a tempo  
poco riten.  
p pp  
ひ はまひる、 --

譜例21

きんいろのひが

譜例22

しきにさくらのはながちる。

譜例23

ちよいとこうふに

譜例24

うつくしい

### 歌唱分析のまとめ

上記6曲の聴取をして驚いたのは約100年前の歌唱のレベルの高さである。音をのばす際の声の張りや、力強さが必要な箇所や高音で要求されているpの繊細な表現まで大変素晴らしかった。また母音は総じて明瞭であり、なんら問題点は見い出せなかった。

しかしその一方で子音については不明瞭で聴き取りにくいものが多かった。そして表8のように分析してみると語頭の子音について聴こえないことが多いということがわかった<sup>5</sup>。

<sup>5</sup>一方、聴き取りやすい子音に関しては、下記の表の通り大きな傾向を見出すことができなかった。

語頭	該当した箇所 (曲数)	語頭以外	該当した箇所 (曲数)
Y	6 (5)	N	3 (2)
M	4 (3)	B	2 (2)
K	2 (1)	M	2 (2)
D	1 (1)	S	1 (1)
H	1 (1)	T	1 (1)
N	1 (1)	TS	1 (1)
T	1 (1)	Z	1 (1)
C	1 (1)		

表8 【聴き取りにくい子音】

語頭	該当した箇所（曲数）	語頭以外	該当した箇所（曲数）
S	12 (5)	T	3 (3)
K	11 (4)	M	3 (2)
H	11 (3)	C	2 (2)
C	1 (1)	K	2 (2)
D	1 (1)	N	2 (2)
T	1 (1)	S	2 (2)
TS	1 (1)	Y	2 (2)
Y	2 (1)	D	1 (1)
		G	1 (1)
		H	1 (1)
		TS	1 (1)
		Z	1 (1)

聴き取りにくい子音は圧倒的に語頭に集中しているのだが、なかでもSが5曲12箇所、Kが4曲11箇所、Hが3曲11箇所と抜きん出ている。このS、K、Hの3つの子音を音声学の視点から分析してみたい。

調音法による音の種類は、SとHが摩擦音、Kは破裂音である。摩擦音と破裂音については文献⑥⑦⑧において次のように説明されている。

⑥松村明 2006年 『大辞林第三版』三省堂

⑦松村明 2006年 『大辞林第三版』三省堂、特別ページ

⑧高見澤孟 2015年 『新・はじめての日本語教育 基本用語辞典』株式会社アスク出版

摩擦音	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調音方法による子音の分類の一。調音器官を接近させて呼気の通路に著しいせばめを作り、そこを呼気が通過するとき生じる噪音。(⑥p.2389)</li> <li>・音声器官に狭めをつくり、そこを通る気流との間に摩擦を生じさせて発する音。(⑦p.46)</li> <li>・声門や口腔内のある部分を狭め、そこに呼気を通し、その部分と呼気の摩擦でできる音。(⑧p.73)</li> </ul>
破裂音	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調音器官閉じ呼気をとめたのち、その閉鎖を破って発音する音。(⑥p.2082)</li> <li>・音声器官を急に閉鎖してとめた息を急に放出して発する音。「閉鎖音」ともいう。(⑦p.46)</li> <li>・咽頭または口腔のある部分で呼気を完全に止めて（閉鎖して）から一気に解放して作る音。(⑧p.73)</li> </ul>

摩擦音は「音声器官に狭めを作り、そこに呼気を通した時に摩擦ができる音」、破裂音は「調音器官を閉じて呼気を止め、一気に解放させてつくる音」ということが分かった。摩擦音S、Hを明瞭に発音するためには口腔内をより狭くし、摩擦音を生じさせる必要がある。また破裂

音Kの子音を明瞭に発音するためには呼気を止める時間が必要と思われる。

三浦環の歌唱で聴き取りにくい子音には、発音時の息の溜めや摩擦を継続させるといった調音をしている様子がうかがえなかった。これは三浦環独自の歌い方とも考えられるが、もしかしたら山田耕筰が問題視している発音に対する意識に関連している可能性もある。今後は、表1に掲載した他の歌手の歌唱についても聴取・分析し、山田耕筰が問題視していたことを明らかにしたい。

## 参考文献

- 高見澤孟 2015年 『新・はじめての日本語教育 基本用語辞典』 アスク出版。  
 松村明 2006年 『大辞林第三版』三省堂。  
 山田耕筰 1950年 『山田耕筰名歌曲全集 第1巻』日本放送出版協会。  
 執筆者不明 1995年 「三浦環」『ニューグローブ世界音楽大辞典 第17巻』講談社、pp.573-574。

## 楽譜

- 山田耕筰 山田耕筰作品全集第9巻(独唱曲5)《きんにゃ もにゃ》pp.69-70、後藤暢子 編集・校訂、東京、春秋社、1993年。  
 山田耕筰 山田耕筰作品全集第9巻(独唱曲5)《来るか来るか》pp.66-67、後藤暢子 編集・校訂、東京、春秋社、1993年。  
 山田耕筰 山田耕筰作品全集第8巻(独唱曲4)《松島音頭》pp.95-97、後藤暢子 編集・校訂、東京、春秋社、1992年。  
 山田耕筰 山田耕筰全集第5(歌曲第5)《佐渡の金山》 pp.76-78、東京、第一法規出版、1965年。  
 山田耕筰 山田耕筰全集第6(歌曲第6)《園の夢》pp.44-46、東京、第一法規出版、1965年。

## 音響資料 (CD)

- |      |           |       |                             |
|------|-----------|-------|-----------------------------|
| 山田耕筰 | 『山田耕筰の遺産1 | 歌曲編Ⅰ』 | : COCA-13171、日本コロムビア、1996年。 |
| 山田耕筰 | 『山田耕筰の遺産2 | 歌曲編Ⅱ』 | : COCA-13172、日本コロムビア、1996年。 |
| 山田耕筰 | 『山田耕筰の遺産3 | 歌曲編Ⅲ』 | : COCA-13173、日本コロムビア、1996年。 |
| 山田耕筰 | 『山田耕筰の遺産4 | 歌曲編Ⅳ』 | : COCA-13174、日本コロムビア、1996年。 |
| 山田耕筰 | 『山田耕筰の遺産5 | 歌曲編Ⅴ』 | : COCA-13175、日本コロムビア、1996年。 |
| 山田耕筰 | 『山田耕筰の遺産6 | 歌曲編Ⅵ』 | : COCA-13176、日本コロムビア、1996年。 |